



まばゆいばかりの漆で仕上げられたへら竿。緑や赤の握りに、現代的なセンスが光る。まさに釣り道具の芸術品だ。

紀州へら竿



和佐 成記 職人歴15年

紀誠集 / 橋本市市脳3-7-7 (魚集工房内)
電話 / 0736-32-4490

子供のころから、手先が器用で、もの作りと釣りが好きだった。いったんは東京の建築関係の会社に勤めたが、「やはり、手仕事が好き」と27歳で、「魚集英雄作」に弟子入り。「親方は父のような存在。竹遊びの目など、まだまだ学ぶところは多い」と話し、親方も「後継者として、次の世代の産地を支えてほしい」と期待を寄せている。42歳

PRINCE of Folkcraft
若き伝承者

しなやかさの中にも芯が通り、釣り師の意に従う。竹という素材を、極限まで研ぎすますことで生まれる紀州へら竿。愛好家なら一度は手にしたい憧れの逸品だ。

七輪であぶりながら添え木をあてがいくせを取る火入れ、寸分の狂いも許されない継ぎ目の削り…。約300に上る工程を経て、1本を仕上げるには半年から1年、時には数年かかることもある。欠かすことのできないのが

地元産の高野竹。堅さの中にも粘るような腰があり、穂先に使う真竹などと組み合わせると顔をはこぼせたと

「紀誠集」の竿銘を持つ若手実力派の匠、和佐成記さんは「しなり具合など数字で表せない注文を、いかに形にするかが腕の見せ場。『これや、こんな竿がほしかった』と言われたときは、職人冥利に尽きます」と顔をほころばせた。

七輪であぶりながら添え木をあてがいくせを取る火入れ、寸分の狂いも許されない継ぎ目の削り…。約300に上る工程を経て、1本を仕上げるには半年から1年、時には数年かかることもある。欠かすことのできないのが

「紀誠集」の竿銘を持つ若手実力派の匠、和佐成記さんは「しなり具合など数字で表せない注文を、いかに形にするかが腕の見せ場。『これや、こんな竿がほしかった』と言われたときは、職人冥利に尽きます」と顔をほころばせた。

しなやかさの中にも芯が通り、釣り師の意に従う。竹という素材を、極限まで研ぎすますことで生まれる紀州へら竿。愛好家なら一度は手にしたい憧れの逸品だ。

七輪であぶりながら添え木をあてがいくせを取る火入れ、寸分の狂いも許されない継ぎ目の削り…。約300に上る工程を経て、1本を仕上げるには半年から1年、時には数年かかることもある。欠かすことのできないのが

磨き上げられた竹の美学 意のままにしなる1本を求め



この伝統マークを使った伝統証紙が貼られている工芸品は、産地組合等が実施する検査に合格した経済産業大臣指定伝統的工芸品です。



伝統マーク